

## 第七章 内田魯庵入社

### 一 つんどく礼賛論

明治三十四年の一九〇一年、すなわち二十世紀の第一年の「学の燈」は「新世紀を迎ふ」と題する社説をかけた云う。

「これを二十世紀というも、これを十九世紀というも、元より人為の区別のみ、顧みればこれ晦朔一日の差異のみ、二十世紀なればとて、日月か西より出づるにもあらず、貧者忽に富むで愚者忽に賢なるにもあらず、春装新に成りたればとて、心神一朝にして新なるべきにあらず、想ひ来らは人の二十世紀といひ新世紀と呼号するもの、何の意味がある、況んや我れの百年世紀を以てせずして、十年一昔を以て区別するをや、然れども我れや今遂に世界文明各国の列に入る、多数に従って之れを称する或は可、唯た其の孰れにしても意味なきや即ち一なり。然れども人は元是れ感情に依て支配さるる所の可笑動物に外ならざれば、二十世紀といひ新世紀といひて、鼓舞的に其の感情を教唆することは、社会人文の進歩を助長するに於て、必ずしも益なしとせず」

そして文明先進の国民の自負をもって世界にのぞむ白人諸国が、去年の北清事件において蛮行略奪をたくましく

して憚らなかったのをみれば「二十世紀以後の人道は、遂にわが国民によってこれを支配せられざるべからず」と壮語し、それにしては国民の自覚足らず、最も信頼する新聞紙が、旧態依然、過去の国民精神の産物にすぎぬ講談や落語をかかけ、広告をのぞいた全紙面の三分の一はこれで占めている。ことに挿絵といえは、丑年というので牛にちなんだ絵を各種のせている苦心にいたっては、無意味な徒労にすぎぬと痛罵し、

「これ果して新世紀的社會の耳目と云えうべきか。余輩は二十世紀の新春はなはだ不縁起ながらも、遂に長歎大息を禁ずる能はざるなり……わが国における二十世紀の前途も、亦はなはだ心細きものならずや」

と結論していささか慷慨の氣を吐くところ、従来の本誌には全く見なかったところである。これまでは社員が同人雜誌的に、あたりさわりのないことを書いていたので、低調で読むに足らざること、青年雜誌の投書文芸や、諸中学校の校友会雜誌の記事より、はるかに劣った。それがこの篇やや読むに足り、論説には後年、マラソン校長として聞え、六十をこえてアムステルダム・オリンピックの長距離競走に出場して、世界の新聞記者のカメラのフラッシュを浴びた日比野寛の「運動世界の学生」の寄稿があつて、誌上に何となく動く氣風のあるのが感ぜられる。

そして外書の広告には、北清事變の余波を反映して、支那、シベリヤ、蒙古などに関するアジア関係の新刊書名が多くかけられ、紙面に時勢と呼応する活氣がみなぎってきた。

又第五十四号の「書籍つんどく者を奨説す」も、北雷（きたなり、つまり一張羅の服を着たなりで有名だった田尻稻次郎の号）博士の説によれば、読書に三種あり、音読、黙読、つんどくであるというのを紹介し、

「かつて日本一の富豪岩崎家がマックス・ミュラー氏の遺書を三万五千円に購求して、これを帝国大学に寄贈

せられしとて、非常に美拳なりとして驚歎せし人もありしが、吾人も勿論、これを美拳なりとして賞讃するを吝まざといえども、ある盆石に三万円を投ぜしとの噂ある岩崎家として、これほどの挙動は元より当然なるべし、吾人はなほ一步を進めて岩崎家が東京における或る価格以上の出版書は必ず一本を購求すべしとの公言をも希望せんと欲するなり」

と云って、世の富豪に「つんどく家」たらんことを奨説するの、「学の燈」がいささか鋒鋌をあらわし來つたのを見る。

## 二 滝廉太郎の出世作

この年の後半から始めたものに、Notes on Some Forthcoming Books という英文で、毎号十数頁から二十頁にわたる記載がある。外国から送ってくる新刊予告書をそのまま、あるいは抜萃してのせたので、便利でもあるし、興味も多い。また「支那問題に関する新着の書籍」と題して、Henry Savage Landor の China and the Allies をランドル氏「支那及連合軍」として日本文で紹介したのはじめ、七冊の解説をつけている。この著者は英文学史上に特異の作家として一地位を占める Walter Savage Landor の孫で画家、旅行家である。作家のランドルの Pericles and Aspasia は平田禿木が「文学界」に一節を訳し、又夏目漱石も「文学論」の引例にもちいっている。

彙報には「中学唱歌出づ」として特別な記事をかかげ、中に収めてある「箱根八里」の第一章「昔の箱根」全部

をかかっている。じつはこの紹介には、それに言及してないが、この「箱根山」と同じくこの小冊子の中にある「荒城の月」と「豊太閤」は、音楽学校の学生の滝廉太郎が懸賞曲の募集に応じて、当選し、たちまち都鄙にわたって愛誦された彼の出世作として名高いが、出版当時はあまりに小冊子であり、且つ唱歌集である故に、大して評判にもものばらなかったであろうこの書を、「学の燈」は新刊紹介の十把ひとからげでなく、特別に取りあつかっている記事に、敬意を表しないではおられぬ。

雑報で時々、学界の消息をつたえ、その最初（五月号）に、四月二十六日新文学博士の学位をうけた学者八人の名がのっている。萩野由之、西村茂樹、那珂通世、松本愛重、小杉樫郎、木村正辞、三宅米吉、三宅雄二郎である。また同じ号に、この年帰朝の文部省海外留学生三十五人の中に、福田徳三、箕作元八、神田乃武、呉秀三、小野塚喜平次などの名前が見える。

### 三 内田不知庵（魯庵）入社

しかし何といっても、この二十世紀の第一年において、丸善の歴史に最も重要だったことは、内田魯庵の入社である。初めに、丸善の骨格は早矢仕有的がつくり、これに魂を吹きこんだのは福沢諭吉だと書いたが、それに肉づけをした者こそ、じつに内田魯庵であった。彼の入社以後の丸善のイメージは、魯庵によって作られたと云ってもいいし、あるいは端的に「丸善即魯庵」と即断しても、多くの異論は出まいと思われる。魯庵をのぞいて、二十世紀になってからの丸善の歴史はあり得ない。

彼は御家人の子で、東京と改名さるるより数か月前の江戸にうまれた。慶応四年五月のこと——この七月に明治と改元されるので、つまり彼は紅葉や、美妙や、露伴とおなじく明治元年東京生誕者の中から一時に輩出した文士群のひとりである。母は吉原芸者であったが、なかなかのしっかり者で、祖父が酔うと槍の穂先をぬいて、家中を躍り出すくせがあり、あぶなくて誰れも、よく止める者がいないのに、彼女だけがたじろがず白刃に立ち向って、その槍をおさえたと言われる。魯庵は金に淡泊できれいで、宵ごしの金を使わぬという乱費家ではなかったが、いわれない金は決して受けぬ潔癖さがあり、趣味がひろく、意外なハイカラで、青年時代から輸入の毛糸屋をおどろかすほどの良質のジャケツを着、都会そだちの社交上の洗練さをそなえながら、どこか硬骨で、みだりなる雷同をいやしみ、世から一步超然としたような所があったのは、父母に負うところが多い。

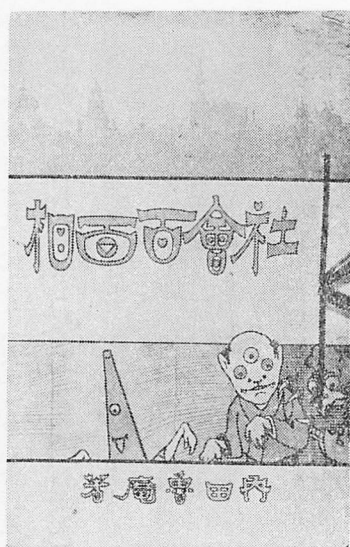
小学校入学前から、父より「大学」や「唐詩選」の素読をうけ、十四、五のころは数学を得意とし、星学を研究する志があり、「八大伝」、「釈迦八相記」、「西遊記」、「三国志」から、乏しかった西洋材料の「コロンブス物語」な



内田魯庵（二十二歳）

どめったやたらに読み、大川屋という貸本屋の人情本をのぞく、外の随筆類までおよそ読みつくした。坪内逍遙が名古屋の大きな貸本屋の草双紙を全部目を通したというのと好対照である。（この一節、昭和女子大学刊行の近代文学研究叢書三一の中の「内田魯庵」による）

学歴はまず中村敬宇の同人社にまなんだ。ここの出身には後



内田魯庵初期の著書

に妙に左翼がかってくる人が多い。魯庵もその一人である。実業を志して高等商業学校を、また建築家を志して工部大学を受験し、大学予備門にも入り、いずれも中途退学し、最後に東京専門学校に入って、ここも卒業まぎわにやめた。二十歳前後には経済学に没頭し、植民事業で移民開拓を志し、その必要から農芸果樹栽培から農林畜産に関する書を涉猟し、農商務省から出た「狸をとる法」というような本まで読んだ。これが世に聞えた彼の博識の背景をなすので、丸善に入り、百科の洋書の鑑別輸入から、「学燈」の編集に大いに役立つのである。

文筆は、叔母婿が明治十年代の翻訳家で「世界一大奇書」(アラビヤン・ナイト)、「人肉質入裁判」(シエークスピアの「ヴェニスの商人」)ヴェルヌの「月世界旅行」などの訳書で名高い井上勤の下訳など手伝ったが、初めは不知庵と号し、明治二十一年、当時の有力雑誌「女学雑誌」に論文が採用されたのがきっかけで、まず批評家

としてあらわれ、その博識と筆鋒の峻烈とで、大いに作家から憚られ、この頃の産物の「文学一斑」は、単行本となった明治最初の「文学概論」であり、「文学者となる法」は、当時の文士の浅薄、陋劣、キザ、意気地なさを諷刺痛罵して、辛辣骨をえぐる奇著である。彼ははじめ尾崎紅葉とも親善だったが、硯友社に風あたりが最もつよかったため、その一派と疎隔し、二葉亭、露伴と爾汝の交わりを呈した。逍遙、鷗外も先輩として尊敬していたが、しかし常に

「坪内や、森も、読むことは大して読むが、しかし、あれらは、あたり前の読まなきやならん本を、あたり前に読むにすぎん。ちょっと軌道をそれた本だと一こうに手を出さない。そこへゆくと若いが上田敏はその趣味があり、こちらから水を向けると、うん、ありゃあ面白いとすぐ反応を示した」

と語ったことがある。このことは、坪内、森両大家は学問の側道に道草をくう面白さがなく、つまり好事本、あるいは平俗にいつてゲテモノ趣味の読書をたのしむゆとりが無い。そこへゆくと常に文芸討究の大道を高唱し、泰西文学新声の発見鑑賞にかけては前後に比なき年少柳村（上田敏のペン・ネーム）が、意外にわき道の書物をたのしむ余裕をもっていたのを賞讃したのだ。

魯庵がいま一人感心していたのは千葉掬香で、吾々は丁酉倫理会の会員、イブセンの翻譯者ぐらいな知識しかもたず、その論文は微温的で歯ざれがわるく、大して感銘をうけていないが、驚くほど多くの書物を求める丸善最上の顧客で、そして英独語が達者で、よく渉獵した。この多錢よく買い、びんべん 懇勉よく読む彼は魯庵と話が合ったらしい。

二十四、五歳のときの著作でありながら、「文学一斑」や「文学者となる法」にあげた欧米文学の書目と、その

説明は、たとえみなは通読できなかったとしても、知識として当時の水準をはるかにぬく。その購求の書籍は、横浜にあったケレイ・アンド・ウォルシュ書店で見つけたのもあったが、やはり東京市内で近くにある丸善で入手したものが大部分を占めたにちがいない。

しかし魯庵が何年ごろから丸善に出入りしたかは、本人も明確には記憶にとどめなかったろうから、語られておらぬ。一番ひろく知られているのは、明治二十三年、尾崎紅葉から、ドストエフスキイの「罪と罰」の英訳が丸善に来ていることを教えられ、さっそく買いにいった。三冊入ってきたうち、二冊はさきに坪内逍遙と森田思軒に買われたが、運よく一冊だけ残っていた。これを読んだ時の感激は、いくたびとなく繰り返して語っている。

彼はついに訳筆をとって、第一巻は明治二十五年に出版したところ、さかなな世評をうけた。今日からみると多く見当ちがいだが、ひとり北村透谷は、これを心読して、二度批評を公けにし、二度とも主人公のラスコリニコフが、私宅の出教師にもおもむかず、無為にくらしているのを、女中から「いったい何をしているのだ」と尋ねられ、「考えることをしている」と答えた点に重点をおいて、くり返してそれに言及し、後年島崎藤村がそれを挿話にして「春」にかき、別にその前、自然主義の勃興初頭の最大収穫といわれた「破戒」は、結構において「罪と罰」をしきうつしにしたものである。この一例からみてもその訳著が文壇を益したこと、いかに多大であったかがわらう。しかし世評の高かったに反し、読書界一般はこれを鑑賞する能力なく二巻（全体の五分の一程度）で続刊中絶となったものの、これは魯庵の文壇的地位を不動のものとした。

日清戦争前後からは「社会小説」の起るべきを提唱し、みずからも「暮の二十八日」をはじめとして、多くの短

篇小説をかいた。しかし自ら「サーカスチックで情味に乏しい」とみとめている通りの欠陥があり、むしろ批評家として、ただに文芸方面のみでなく、ひろく社会全般の事象に目のとどく博識多趣味によって、重きをなした。丸善に入ったのは、そういう経歴をへてきた後である。

みずから語るところによると、横浜にいてトルストイの「アンナ・カレニナ」の英訳をもとめ、かえりに丸善によって、

「この店ではこういう本をいつも置いていないとダメだ」

と云ったら、誰れかがその言に心を留め、それが縁となって丸善に迎えられるに到った。

いったい魯庵が、トルストイの紹介、研究、翻訳に大いにつくした功績は、のちのロシア文学の米川正夫、中村白葉、原久一郎の三専門家のなしたところに、まさるとも劣るものではない。年少にして、植村正久から「わが宗教」を与えられてその偉大を知り、明治二十五年には「めおと」を博文館から出版した。これ同叢書の田山花袋の「哥薩克兵」が、日本最初のトルストイの完訳単行本なるに對し、それについて第二の先駆的地位を占める。しかも巻末にそえられたそれまでの邦文トルストイ文獻の目録をみると、魯庵がいかに早くから、その方面に心をとどめて断翰零墨も見のがさなかったかがわかる。これは日本のトルストイ移入史研究の最初の基礎となったもので、この点は大阪の牧師百島操が継承して、驚異的な蒐集をしたが、晩年魯庵自身も「日本におけるトルストイの移入と伝播」の一文を発表して（春秋社版「トルストイ全集」付録）、いまに研究家に珍重せられている。

魯庵はドストエフスキイの翻訳によって、大いに文壇に盛名を馳せたといっても、トルストイはその前から親し

み、そして一生涯傾倒畏敬して、最後までそれに関する述作言及にとめた。そのトルストイを縁として丸善にはいった魯庵は、他のどの功績よりもトルストイを紹介し、普及し、宣伝した実績が目立っている。筆者は一時の現象として「丸善即魯庵」の観があったといったが、その魯庵の丸善在社時代は「魯庵即トルストイ」といっても極言ではない。したがって日露戦争に前後する数年は、「丸善即魯庵即トルストイ」のイメージさえ与えた。次章から次第にその様相があらわれてくることになるう。

#### 四 「店頭の半日」

「学の燈」第四十七号（明治三十四年四月）の「店頭の半日 山雨生」という記事がある。文は巧を弄せず、素朴稚拙だが、それだけに又、当時の丸善の面目、見るが如くである。これを転載すれば、いかなる記事をつくるよりも容易に、二十世紀第一年当時の丸善の生きたる姿を伝えるであろう。

##### 店頭の半日 山雨生

暑いも寒いも彼岸までと昔の人の諺は今も変らぬ。此二三日のボカ／＼と暖い時候は、余をして土一升到金一升日本随一の繁昌区と言はれるお江戸日本橋の真中だけ、奥二階の一隅、四畳と半畳とに劃られたる編輯局、否寧ろ編輯机とも言ふべき一室に安穩として屏息するを容さぬ。切めてはお彼岸の中中市街に於ける善男善女、往々来るさの賑ひを見て、蒸しきった頭脳でも冷やそふとノコ／＼店頭に出掛けて来た。

店は今昼飯が済んだばかりで、番頭さんは帳場格子の中で往來を見ながら、まだ楊枝でポツリ／＼と齒をほじくって居る、其側に帳簿方の井上さんが立膝をして新聞を見ながら時々例の白い八字髻をひねって居る、松さんは今帰りかけて居る客人の受取を書て居る、貞どんと政どんとは向側で火鉢を真中にして、表を見てはニヤリ／＼と笑ひながら小声で何か話をして居る、恐らく昨夜の阿弥陀の饅頭が甘かったことでも思ひ出して話して居るのであらふ、勝どんは表口で一生懸命になって自転車に空氣を入れて居って、其傍には六どんがボンヤリ立って之を見て居った、六どんは近頃福島辺の山の中から出て來たので謂はゞ小僧見習である、色が浅黒くて齒は馬の様に黄色くて浅黄縞の地織に紺の前垂を掛けた様子は、ドウしても未だ田舎者の標本たるを免れない、お負けに言葉がズウ／＼で時々通弁がなくては分らぬ様なことを言ふ、乍併性質は至って惇朴で尻が輕くて、まだ役には立たないが愛らしい所は、却て他の悪磨れに磨れた子僧ついでよりは余程多いのである、先頃も六どんが斯んなことを言つて、一坐の笑声に春の日永の店の寂寞を破ったことがある、勿論言葉は其の故郷の方言ではあるがそれを翻譯して云ふと、

己れの国では馬は立ち止ってゐなくては糞小便をしないが、鉄道馬車の馬は駆けながら糞小便をする、流石は忙しい都会の馬は違つたもんだ、人も矢ッ張り忙しい時には歩きながらやるのかね、

余は之を聞いて六どんの甚た目の付け所の善いのに感心して、其の尻の輕いのが所謂る人も矢ッ張り忙しい時には歩きながらやるのかねといふ疑問より胚胎し來たつたといふことを知つた、乍併此六どんが四五年も経つて、彼の地織の浅黄縞が着破れ、横町の湯屋に彼の浅黒い煤ぶつた顔に光沢が出て、日の丸齒磨で齒が真

白に磨き上げられた頃には如何なるであろふか、思へば少年の前途ほど心配のものはない。

吉沼の大時計が一時をチャーンと打った時に、貞どんが踏台を持ち出して時計を巻き初めた、恰度其の時に二頭立の黒塗馬車が一台店へ横着けになって、中から出て来たのは四十五六の髻茫々たる西洋人で何か言ひながら二階へ昇って往った、夫に続いて角帽に金釦の制服で襟に丁の字のある大学生が一人遣って来て、

チヨツと英書を見せて呉れ

と言って椽へ上りかけたが、余り其の靴の汚れたるを見て流石に躊躇した、スルト政どんが隙かさず、

宜しふ御座りますドウゾ

と言ったので大学生は其の儘二階へ昇って往った、暫くすると今度は何とか堂と書いた箱車を子僧か引ッパって威勢よく馳け込んで来て、乱暴に其の蓋を開けて中から厚ひ注文帳を出して無難作に、此少し前に奥から出て来て火鉢の側に坐った廉さんの前へ放り出して、アゝアゝとさも怠氣そふに欠伸を二ツ三ツして後ろの方へ反りくりかへった、ソーして廉さんが帳面を見て居る間に其小僧は勝どんの方へ往って切りに話しかけて居る、此子僧中々の談論家と見えて、二タロ三口勝どんと何か話をしたと思ふ内に、大きな声で、

馬鹿言へッ……ソナナことがあるもんかい……

日清戦争でも此間の戦争でも日本軍は一度も負けやしないじゃないか、それだもんだからこれじゃ用心しなけりやならないといふので、ドン／＼軍艦や兵隊を此方へ送るのさ……ソーして向ふの準備が出来て仕舞ッちゃ仕方がないじゃないか、ダカラ其の用意の出来ない内に遣りや充分さ……君なんぞソナ

臆病なこと言ってるから仕方がないや……

何やら大に天下の大勢を論じて居る、其の内に廉さんがオイ／＼と呼んだので話を中止して此方に来ながら、懷ろからヒーローを出して廉さんの前の火鉢で火を附けてスバリ／＼と遣り出した、ソコで廉さんが唯さへ円い眼玉をムキ出して、

オイ君烟草などを喫むと巡査に叱れるぜ

と言へば小僧は笑ひながら、

モー後にや一本しかありやしないは、取り上げられても大丈夫さ

此小僧中々始末におへない徒ら者なり、折柄忙しソーに早足にて一人の巡査が、

オイ此所に………があるか

と言って這入って来た時の小僧の顔といつてはなかった、急いで烟草を火鉢の灰の中に突込んでソシラぬ顔で居たが、夫でも居心が悪ひと見えて先の広言には似もやらず、狐鼠／＼と廉さんが出した本を小車へ積み込んで、

サヨナラ

と言ひながら後ろを振り向て舌をペロリと出し、

サリとはツライねといふ様なこと仰っしゃいましたね

と流行のストライキ節を謡ひながらガラ／＼と車を牽いて往って仕まった、

此方には巡查先生奥州弁の例のズー／＼で誰にも其言ったことが聞き取れなかった、

廉さんが、

ヘイ……

と一度問ひ返したが矢張解らない、此時余と一緒に帳場格子の中に居った松さんが立ち上って更に之を尋ねた、  
巡查の更に答へた言葉は余には同じく判然聞えなかったが、松さんには解ったと見えて、

ヘイ夫はありません

と言った時に巡查は

スシヨウ堂の発行で此所にはあるまいと思つたが……

と何やら言ひながら出て往った、後で聞けば風俗壊乱で発売頒布を止められた新恋愛文学がありはしないかと調べに來たのであつたそふな、

暫くすると十一二多くて三四にもならふかと思える西洋婦人が自転車で遣つて來た、之はお馴染と見えて小僧に一瞥を呉れてサッサと二階へ昇つて往った、

其時店ヘドヤ／＼と這入つて來たのは地方の仕入客で連が四五人もあつた、之は一切松さんが引受けて應對をして居る、其所ヘガラ／＼と車で來たのが海軍の少年士官で頗る付の美婦人を同伴して居った、夫も廉さんと二タロ三口話して二階へ昇った、其中に中学の書生らしい人、官員さんらしい人、会社員らしい人、本屋の小僧、種々雑多の人が込み入つて來て、折から二階からは先の髯茫々たる西洋人大学生などが各々手に一包

の本をかゝへて帰るなど、今店は混雑の真最中である、

店の小僧の中で一番雄弁なのは政どんである勿論古参ではあるが……政どんは今官員さんらしい二人連れの客に向って切りに万年筆の効能を説明して居る、

マ―あなた方が御出張になる、お立の忙しい時にソレ墨池ソレ筆、ソレ半紙、と夫丈でも大騒ぎです、本筆ならナイフの用意がいる、折角用意をした、墨池が鞆の中でヒックリカへて墨がコボれる、折角削って置いた本筆が折れる、お負に書いた字は薄くて後で分らぬ、……マ―どの位不便でしょふ、万年筆一杯インキを容れて御出かけになる、大概の御用なら十日や二十日は大丈夫……決してコボれることはなし、夫に第一細く書けますから端書一枚もあれば大概の用は足りります、ヨシ御内用なら手帳の紙でもよろしい、一度お使になると便利のことは夥ふございます……

などゝ喋々お饒舌するので、何事だと外の客までが見に来ると、政どん容易には見逃さぬ、失礼ながらあなたはお医者様で

と手に持って居る書物を見て直ぐに切り込む、

お医者様には誠に重宝ですよ、病家においてになる、先づ聴診器か何かと一緒に鞆の中から出して、左の手には金時計……診察が済む此筆で処方箋をスラ／＼と……余程文明的ですな……

オヤ山岸さん暫くですな、あなたの銀行ではマダ万年筆をお買上げになりませんね、ダカラいけない皆さんがソー言ひますよ、あなたの銀行は堅くては善いが、何時でも待たせるには困る……でしょふ、此間

もあの這り口に居る人が伝票を書くに、黒のペンを赤のインキスタンドに入れて大騒ぎして居るの、之を一本買ってお渡しなさい、メッタに墨を入れる世話もなし、第一事務がはかどりますよ……

とノベツに饒舌なからフト自分の傍に書生が腰を掛けて其話に聞とれ居るを見て、

デスが此万年筆か何が一番役に立つと言って、マー書生の方の学校の筆記でしょね、講議(マツ)の中で迎も鉛筆を削りて居る間はなし、ダカラッて速記者の様に鉛筆の一ダースも用意するも世話だし、夫に第一後で度々復習すると消えて仕舞し、インキとペンですと墨をつける間に後れて書落すし、夫が此万年筆で御覧じませ、此通り横文字でも漢字でも片仮名でも

と自分で色々の文字をスラ／＼と書いて見せて、

大概十時間や二十時間の講義で中のインキが無くな(マツ)とはない……

と滔々弁し出した所は大道商人も宜しくといふ有様であった、之で障害かなかったら尚どの位饒舌ったか知れなかったが、此時恰度奥から電話係の老人が、

政どんサッキ万年筆を買った何野とかいふ人から至極重宝だが、ペンのがモー一本欲しいといふて来たが、お前さん其人は分って居ますか

と言ふて来たので、政どん大得意で電話室へ飛んで往って跡は大風のナイだ様であった、此傍聴人否御客様か皆買はれたかドウだか、此時余はチョット便所へ往ったので知らなんだ、

便所から来て見ると今廉さんか切りと一人の客に応待して居る、其客人は年頃三十一二で、肩から襷に大き

な鞆を横腹に下けて居る所は、ドウ見ても都人士ではない様だ、鼻下には八字髻はちまきを生して言葉は恰度号令をかける様な調子である。

オイ世界の地図の善ひのはないか

廉さんは貞どんに二階から持つて来いと言ひ付けた、其の間に客人は切りと廉さんにアレをコレをと色々の書籍を出さして見た、其の内に腰をドッカと下ろして鞆の口を開いて書籍目録の様のもを出して、廉さんに切りと尋ねて居た、二階から貞どんが地図を持つて来たので之を広げて見て、

ウム之は余り善くないな…… ナニ六円……フム……己れは今度此所から来たのだ

と台湾を指して夫から何か大に対露政策を論し出した、廉さんはヘイ／＼と言って謹聴した、夫か済むと今度は何か理化学や写真の本を出さして見て、遂には自分の鞆の中から写真を出して見せた、ソ一して一枚一枚に其説明を始めた、夫は概ね台湾の写真で、夫で大方此客は該地から帰任の陸軍下士か夫より上等で少尉位の人であろふといふことが分った、

チャーンと吉沼の時計がタッタ一つ打ったので、余か時計を見ると恰度四時半であつた、京橋以西逋信省や農商務省或は諸会社の人達が帰途になるので一入店は雑聞して来たが、別段これといふ目立った変り物は来ない、其中に前に二階に上つた海軍士官と其の夫人とが出で、来た、自転車の西洋人の娘も下りて来た、其の娘かチャイと挨拶して何の苦も（マ）自転車にヒラリと乗って行く様は実に見事であつた、ドウも小供は日本人より西洋人の方が無邪気で活潑で面白い所がある、サッキから廉さんの担当した台湾士官の話は追ひ／＼調子が乗つ

て来た、此時店の来客は暫く途絶えて、店員一同の視線は此客一人に集まった、何を言ふのか能くは分らぬが、廉さんは切りにビョコ／＼と頭を下げては何かを言つて居る、廉さんは此客人にツカまつてモー二時間の余になる、フランクリンであつたら段々本の価が高くなつて、一円の者がモー三円にもなる程である、余も大概にヒッ込もうと思つたが、此結果が見たいので暫く猶予した、恰度奥から六時の晚餐の撃析が鳴つた時に、台湾士官も漸くにして腰を上げた、夫でも買ひ物が四十何円であつた時には、余も流石に有難ひ御客であるといふことを覺つた、此客人が歸つたので余も遂に勝手に立つて晚餐にありつくことを得た。（「店頭の半日」終）